

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月28日現在

機関番号：10101

研究種目：新学術領域研究

研究期間：2008～2012

課題番号：20101005

研究課題名（和文） 帝国の崩壊・再編と世界システム

研究課題名（英文） The Collapse and Restructuring of Empires and Transformation of the World System

研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号：40281852

研究成果の概要（和文）：

近代ユーラシアの諸帝国を比較し、帝国権力と現地社会の非対称な相互作用、帝国間競争における小国や越境集団の役割、周縁・植民地の近代化、そして20世紀の帝国崩壊と脱植民地化の多様な展開を論じた。現在の地域大国は半帝国・半国民国家的な性格を持ち、かつての帝国の遺産と記憶に大きな影響を受けている。情報の不完全性のもとでの権力と少数者集団の駆け引きを論じる帝国論の方法は、現在の大国・小国関係の分析にも役立つ。

研究成果の概要（英文）：

In this comparative study of modern empires in Eurasia, we examined diverse phenomena such as asymmetric interaction between imperial power and local society, the role of small states and transborder minorities in inter-imperial rivalry, modernization of peripheries and colonies, and the collapse of empires and decolonization in the 20th century. The present regional powers are half empires and half nation-states, and are influenced by imperial legacies and memories. The method of analyzing tricky relations between imperial power and minorities is also useful to the study of relations between today's great powers and small countries.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	5,400,000	1,620,000	7,020,000
2009年度	12,300,000	3,690,000	15,990,000
2010年度	16,200,000	4,860,000	21,060,000
2011年度	17,700,000	5,310,000	23,010,000
2012年度	12,300,000	3,690,000	15,990,000
総計	63,900,000	19,170,000	83,070,000

研究分野：総合人文社会

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：比較史、東洋史、西洋史

1. 研究開始当初の背景

1990年代以来、帝国論・帝国史研究は世界的に隆盛を見てきた。イギリス、オスマン、清、ロシアなどの帝国について、それらの拡大と統治のメカニズムを従来とは異なる角度から解明しようとする研究が爆発的に増

えたほか、アメリカを「帝国」として論じたり、国際システム全体を帝國的秩序として描いたりする研究も多く現れた。しかしこれらの帝国の間にどのような共通点と差異があるかについては、十分な比較研究がなされてこなかった。

本新学術領域研究はユーラシア地域大国の比較研究を課題としており、その中の第4班である本計画研究は、近年台頭している地域大国、特にロシア帝国・ソ連の継承国であるロシア、清朝の領域をほぼ継承している中国、ムガル帝国衰退後イギリス帝国の支配下に置かれたインドが、歴史的に帝国と深い関わりを持っていることに着目した。帝國的な過去が現在の地域大国の政治体制や世界認識、自己表象などにどのような影響を与えているか、また各時代の「帝国」的国際秩序の中で個々の帝国や地域大国がどのような位置づけにあるかを究明することは、本領域研究全体にとって重要な意味を持つと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、ユーラシアの近代諸帝国史を実証的に研究すると同時に、以下の3つの課題を解明することを目標とした。

(a) 諸帝国が近代という時代にどう適応しようとし、どのような過程を経て崩壊したかを比較して、その失敗の経験や記憶が、今日のアメリカ「帝国」や地域大国にとってどのような意味を持つかを考察する。

(b) 帝国の崩壊後、後継国がその衝撃に対処しながら、帝国の遺産と新しいイデオロギー・国家原理の双方に基づく国家建設を行ったことが今日の地域大国の力の基盤になっていると見て、その過程を比較する。

(c) 世界システムの中で帝国・地域大国・国民国家がそれぞれどのような位置づけ・役割を持っているか、現在の世界において帝国システムは有効に機能しうるのかを検討する。

これらの検討を通して、本研究は歴史的視点に基づく国家論の構築をめざした。

3. 研究の方法

本領域研究はロシア、中国、インドを主な研究対象としていたが、本計画研究では、ユーラシア近世・近代帝国として重要なオスマン帝国とイラン、東アジア近代史に決定的なインパクトを与えた日本帝国、近現代の国際秩序を考察するうえで欠かすことのできないイギリス帝国とアメリカを対象に加えた。これにより、静態的な比較ではなく、近世から現在に至る世界における帝國的秩序の変容を動的にとらえ、その中にロシア、中国、インドなどを位置づけることを試みた。また、帝国論がユーラシア比較地域大国論に対して持つ意味を示すことを究極的な目標としつつも、地に足のついた議論をするため、必要な時に、一次史料に基づく帝国史研究に立ち返ることを心がけた。

具体的な活動としては、本計画研究による独自企画としての研究会・国際シンポジウム・ワークショップのほか、学会パネルや領域研究全体集会での企画、他の班との共催研

究会を含め、30回の研究会・討論会を開いた。中でも2012年1月19-20日に開催した国際シンポジウム「近現代帝国の比較：世界秩序変動の中での帝国統治と脱植民地化」は、本計画研究が扱う諸テーマを総合的に論じる場となった。このシンポジウムを含め、研究の遂行過程で多くの外国人研究者との協力関係が確立し、特にロシア領中央アジア史と英領インド史の比較を専門とするアレクサンダー・モリソン（リヴァプール大学）、インドの脱植民地化を論ずるアディティヤ・ムカルジー（ネルー大学）らから何度も協力を得た。領域研究の他の班との協力の場としては、2009年7月11日の全体集会セッション「ジェンダー論による地域比較の可能性」

（第6班と共同企画）、2010年1月23-24日の国際ワークショップ「イスラームと帝国」（第5班と共催）などを組織した。

4. 研究成果

具体的な研究成果は極めて多岐にわたるが、主なものは以下の通りである。

(1) さまざまな帝国の植民地統治、特にロシア帝国領中央アジアと英領インドの統治を比較した。いわゆるコラボレーター論に沿って、イギリス帝国が現地の協力者を情報収集や統治に積極的に使ったのに対し、ロシア帝国では現地民への不信感が強かったことなど諸帝国間の違いを明らかにすると同時に、オリエンタリズム的な民族観や、イスラーム法・慣習法の維持・再編などのある程度の共通性も指摘した。

(2) 近代化に対する帝国および支配下の諸集団の態度を分析した。西洋に倣った近代化の必要性は、長い時間差はあるが、19世紀末までにはユーラシア諸地域の共通認識となった。オスマン帝国やロシア帝国では、中央から周縁への視線、領内の「先進的」民族から「後進的」民族への視線に、西洋由来の文明的格差の認識・帝国意識が濃厚に付着した。英領インドやロシア帝国では、ムスリム統治のためさまざまな形でイスラーム法を帝国法の体系に組み込む試みがなされたが、イスラーム国家であるオスマン帝国でも、国土と臣民の管理のため西欧法を参照しながら国法を整備し、学説による異同を含んでいたイスラーム法を国家が固定化するという類似の現象が見られたことは興味深い。被支配者の側から見れば、19世紀までの帝国においては、皇帝・政府から集団ごとにも与えられる権利・義務をより有利なものにすることが課題であり、帝国統治のもとで安定が享受できる限りにおいて、異教徒支配をも正当化するさまざまな論理を編み出していた。しかし近代化が重要課題となった時代には、イギリス帝国・ロシア帝国統治下の現地エリートが帝国を教育・技術・政治運動などの近代化の参照

枠としたのに対し、ウイグル人やチベット人は清朝・中国を近代化の手本とはしないという、態度の分岐が明瞭になった。

(3) ロシア帝国、清朝、オスマン帝国、イギリス帝国をめぐる国際秩序の変化を考察した。イギリスをはじめとする西欧諸国が世界に国際法などの近代西洋的国際秩序を広めたことはよく知られているが、清朝・オスマン帝国を含むユーラシア地域においてはロシア帝国の役割も大きかった。また、帝国間の関係や勢力争い（グレート・ゲームなど）において、短期的には、小国や越境的集団が帝国側の情報の不完全性や建前と実状の乖離を突いたバーゲニングを展開し、自らの利益のために帝国を利用しながら帝国間競争の行方を決定づけたが、長期的には帝国・大国側の戦略が優越して小集団の主体性を奪うことが多かったことを確認した。

(4) 国家意識や歴史認識の観点から諸帝国・地域の比較を行った。帝国統治の体系化とナショナリズムの成長が交差する中で、「伝統」や「民族起源」が発見され、学問的な装いのもとで神話化されるというパターンは、具体的な過程の違いはあれ多くの地域に見出すことができる。ただし、こうした動きがロシア帝国やオスマン帝国では民族を、英領インドでは宗教を単位とした分節化につながったのに対し、古典的な大帝国・中国が欧米および新興の帝国・日本による半植民地化を経て復興し、冷戦も関係して域内国間の対峙が長く続く東アジアにおいては、民族主義を取り込んだ強い国家意識が現在まで大きな影響力を持っている。また、国家がしばしば、「母なるインド」のように女性（時に男性）として表象されることに注目し、国家意識とジェンダーの関係を議論した。

(5) 多くの帝国の崩壊や変質の契機となった第一次世界大戦の時期に注目し、異なる背景を持った帝国・地域が共通の経験に巻き込まれる強制的同期化ないし共振の様子を論じた。特に、総力戦のもとで動員力を持つナショナリズムの成長が、純粹な独立運動につながっただけではなく、帝国と一定の親和性を持つ自治運動や、連邦構想など多様な展開を見せたことを明らかにした。

(6) 20世紀に進行した脱植民地化の意味を検討した。植民地統治が独立後の経済発展に寄与したか否かは極めて論争的な問題だが、少なくとも、植民地時代に育ったエリート層が独立後の政治経済を担うという現象は多くの地域で見られ、特にインドでは、彼らの存在により権力移譲型のスムーズな脱植民地化が可能となった。これは、時代は異なるが、ソ連体制下で育ったエリートが指導する民族共和国が、ソ連崩壊の受け皿となったことと比較可能である。また、第二次世界大戦期のインド軍海外派兵費用としてイギリスが

拠出したスターリング残高が、インドの経済開発に利用されたことも注目に値する。また、冷戦期に、ソ連・中国の社会主義とインドの非同盟主義が、帝國的秩序に挑戦し脱植民地化を進めるというアピール力を持ち（ソ連の場合は第三世界に対する経済援助とも組み合わせさせて）、各国が大国としての地位を得るのを助けたことを明らかにした。アメリカによるアジアの戦後秩序形成に対するアジア諸国政権の協力と反発のあり方を、帝国論のコラボレーター論を応用して分析する、斬新な方法も編み出した。

(7) 帝国論と現在の世界秩序や地域大国のあり方との関係を議論した。自由を尊重するアメリカが、自らの価値観への自信ゆえに対等な国家を許容しない「帝国」になった逆説や、帝国崩壊後にその領域を引き継いだ国家は、帝国を反面教師としながら結局帝國的な国家として再編を行うという矛盾を明らかにした。また、中国の新朝貢論やトルコのオスマン主義のように、帝国イメージを現在の大国的主張に利用する言説を分析した。

これらの成果に基づき、2に掲げた3つの課題への答をまとめ直せば、以下のようになる。

(a) 近代性の中心的な担い手であったイギリス帝国、ヨーロッパの周縁で帝国の拡大と近代化を同時に進めたロシア帝国、近世帝国から近代帝国への転換を図りつつも領土の縮小を止められなかったオスマン帝国、古典的な帝国としての意識が強く、近代化路線に転換して間もなく崩壊する清朝と、各帝国と「近代」の関係はさまざまである。しかし、帝国中央から周縁への視線、統治における現地協力者の役割、慣習法の再編、近代国際法を受容といった論点でこれらの帝国を同時代的に比較することは十分可能であり、統治の技術や他者認識の枠組みの伝播・近代化が、必ずしも帝国全体の近代化のスピードに拘束されずに進んだことが分かる。帝国の崩壊要因も、内的なものと外的なものを含めさまざまであるが、後世の人々は、崩壊の過程から教訓を得ようとするよりも、最盛期の記憶を現在の地域大国・世界大国の発展に結びつけようとする志向が強い。

(b) ロシア、中国、インドにおける帝国の遺産については以下のことが言える。〈1〉ロシア帝国・ソ連の非民主的な政治とアウトルキエ的な経済運営は現在の旧ソ連諸国に否定的な影響を残している。他方、ロシア帝国の版図をほぼ受け継ぎながら自らが帝国であることを否定しようとしたソ連の連邦制は、その崩壊時に民族共和国が比較的平和裏に独立することを可能にした。ロシア語圏の緩やかなつながりはロシアが地域大国として影響力を持てる空間を確保している。〈2〉中国は古典的大帝国であったがゆえに近代国

家への転換が遅れ、帝国主義の被害を受けたが、それゆえに清朝のような多元的帝国ではなく単一国家を作ることへのこだわりを強めた。この意識は現在の中国の発展への熱意と親和的だが、少数民族の意識とは齟齬をきたし、新疆・チベットの民族問題を深刻化させている。〈3〉インドは長い独立運動を経て比較的スムーズに脱植民地化を果たし、民主主義体制を確立させたという点では、イギリス帝国の良い面を受け継いだ。しかしイギリスの分割統治を一因として生じた印パ分離独立は、現在も続く印パ対立とそれに関係する国際テロに影を落としている。

(c) 現在の世界において、帝国が国民国家に完全に置き換わったわけでも、国民国家が無効になって帝国の時代が再来したわけでもない。国民統合を通じて国家の一体性を強めようとする一方、多民族支配と中央集権体制の両立のために、多様な住民の階層的統治という帝國的要素を捨てきれない半帝国・半国民国家的な国は、特に地域大国には多く存在する。また、世界的な大国としての意識を持つ国々は、国際的にも帝國的・覇権主義的な行動を取ることが多い。しかしこれらの国の意志が常に貫徹するわけではなく、大国側の情報・認識の不完全性により、小国・少数者側にバーゲニングの余地が生まれたり、大国が現地の事情に合わない行動を取って支配や派遣の危機を招いたりするという構図は、近代史に見られたものと共通している。

研究成果の刊行としては、メンバー各自による論文発表のほか、領域研究の「比較地域大国論集」シリーズで日本語報告集「比較帝国論の世界」と英語報告集 *Empire and After* を刊行し、また本研究の準備段階に開催した国際シンポジウムの成果をもとにした論文集 *Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts* を、イギリスの Routledge 社から刊行した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 92 件)

①山室信一, 連鎖視点からみる辛亥革命と日本, 経済史研究 (大阪経済大学日本経済史研究所) 16 号, 2013, 査読無, 27-57.

<http://www.osaka-ue.ac.jp/research/nikkeisi/lab/contents/16.html>

②池田嘉郎, ソヴィエト帝国論の新しい地平, 世界史の研究, 234 号, 査読無, 2013, 1-12.

③宇山智彦, カザフ知識人にとっての〈東〉と〈西〉: 階層的国際秩序の認識と文化的精神性の希求, ユーラシア世界 1 〈東〉と〈西〉 (塩川伸明・小松久男・沼野充義・宇山智彦編, 東京大学出版会), 2012, 査読無, 153-179.

④古矢旬, 米国衰退論の現在: 背後に潜む文明的問い掛け, 外交, 16 号, 2012, 査読無, 52-59.

⑤高本康子, 日本人入蔵僧資料に見る戦時期「喇嘛教」工作と熱河承德, 印度学仏教学研究, 61 卷, 2012, 査読有, 513-518.

⑥池田嘉郎, 帝国、国民国家、そして共和制の帝国, クアドランテ, 14 号, 2012 年, 査読有, 81-99.

⑦Kan Hideki, The Rise of China and US-Japan and US-ROK Alliances Developments Compared, アジア太平洋論叢, 19 号, 2011, 査読有, 3-50.

⑧粟屋利江, 1930 年代インドにおける「国民国家」の模索: 国民・宗教・女性, 岩波講座 東アジア近現代通史 第 5 巻, 新秩序の模索 1930 年代 (和田春樹他編, 岩波書店), 2011, 査読無, 310-330.

⑨粟屋利江, インド人知識層の「韓国併合」認識をめぐって, 「韓国併合」100 年を問う (国立歴史民俗博物館編, 岩波書店), 2011, 査読無, 263-274.

⑩秋葉淳, タンズィマート初期改革の修正: 郡行政をめぐる政策決定過程 (1841-42 年), 東洋文化, 91 号, 2011, 査読無, 219-241.

⑪川島真, 近現代中国における国境の記憶: 「本来の中国の領域」をめぐる, 境界研究, 1 号, 2010, 査読有, 1-17.

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/japan_border_review/no1/01_kawashima.pdf

⑫粟屋利江, インド近代史研究と「植民地責任」論, 歴史学研究, 865 号, 2010, 査読無, 22-26.

⑬Akita Shigeru, The East Asian International Economic Order in the 1950s, *The International History of East Asia, 1900-1968: Trade, Ideology and the Quest for Order* (Antony Best ed., London and New York: Routledge), 2010, 査読無, 153-167.

⑭池田嘉郎, ユーラシアの地政学としてのソヴィエト建築学: モスクワ、ノヴゴロド、北京, 地域研究, 10 巻 2 号, 2010, 査読有, 90-108.

⑮宇山智彦, グルジア紛争後の中央ユーラシアとロシア: 小国のバーゲニング・パワーが作る国際秩序, 現代思想, 3 月号, 2009, 査読無, 206-217.

⑯山室信一, 国民帝国・日本の展開と学知の位相, 九州史学, 152 号, 2009, 査読無, 27-38.

⑰古矢旬, オバマは何を変えたのか, 外交フォーラム, 2 月号, 2009, 査読無, 64-70.

⑱Kawashima Shin, China's Re-interpretation of the Chinese "World Order," 1900-40s, *Negotiating Asymmetry: China's Place in Asia* (Anthony Reid and Zheng Yangwen, eds., National University of Singapore Press), 2009, 査読有, 139-158.

⑲菅英輝, アメリカ「帝国」の形成と脱植民

地化運動への対応、イギリス帝国と 20 世紀 4 脱植民地化とイギリス帝国、(北川勝彦編著、ミネルヴァ書房)、2009、査読無、111-152.

〔学会発表〕(計 80 件)

①高本康子、大陸における対「喇嘛教」活動：満洲国興安北省を中心に、2012 年度内陸アジア史学会大会、2012 年 11 月 4 日、北海道大学、札幌市。

②池田嘉郎、革命期ロシアにおけるリーダーシップ：構想・制度・人物、ロシア・東欧学会、ロシア史研究会、JSSEES、日本ロシア文学会 2012 年合同大会、2012 年 10 月 7 日、同志社大学(京都市)。

③川島真、日中 150 年史のダイナミズム：憧憬・敵対・友好・競存、日中国交正常化 40 周年記念シンポジウム「グローバル化の中の社会変容：新しい東アジア像を形成するために」(日本学術振興会主催)、2012 年 8 月 31 日、中国社会科学院、北京。

④Akita Shigeru, *Economic Diplomacy of Jawaharlal Nehru Administration after Decolonization of South Asia*, The XVIth World Economic History Congress, 2012 年 7 月 10 日、University of Stellenbosch, South Africa.

⑤Uyama Tomohiko, *Invitation, Adaptation, and Resistance to Empires: Cases of Central Asia*, Slavic Research Center Winter International Symposium “Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order” 2012 年 1 月 19 日、Slavic Research Center, Sapporo.

⑥Kawashima Shin, *The Image of Traditional World Order and Tribute Relations in Min-kuo China*, Slavic Research Center Winter International Symposium “Comparing Modern Empires: Imperial Rule and Decolonization in the Changing World Order” 2012 年 1 月 19 日、Slavic Research Center, Sapporo.

⑦Fukuda Hiroshi, *Central Europe as a Shifting Zone: “Nostalgia” for Habsburg Monarchy and Sovereign States in the Interwar Period*, BRIT (Border Regions in Transition) XI Conference, 2011 年 9 月 7 日、University of Geneva, Geneva, Switzerland.

⑧池田嘉郎、「共和制の帝国」の誕生：第一次世界大戦とロシア革命(小シンポジウム「第一次大戦と帝国の遺産」、オーガナイザー：池田嘉郎)、日本西洋史学会 第 61 回大会、2011 年 5 月 15 日、日本大学文理学部(東京)。

⑨Akita Shigeru, *The Aid-India Consortium and the International Order of Asia, 1958-1965*, The Third European Congress on World and Global History (ENIUGH), 2011 年 4 月 15 日、London School of Economics, UK.

⑩宇山智彦、グレートゲーム再考：中央アジアにとっての帝国間競争の意味、国際政治学

会 2010 年度研究大会、2010 年 10 月 29-31 日、札幌コンベンションセンター、札幌市。

⑪Kawashima Shin, *Sino-Japanese Controversies over Textbook Problems and the League of Nations*, International Conference Networks in Times of Transition, 2010 年 10 月 21-22 日、University of Heidelberg, Germany.

⑫Ikeda Yoshiro, *Cultural and social relations between Russia and Japan during World War I*, ICCEES (International Council for Central and East European Studies) VIII World Congress, 2010 年 7 月 27 日、Stockholm City Conference Centre, Sweden.

⑬Akiba Jun, *Local Solidarity in the Ottoman Bureaucracy during the late 18th and 19th Centuries: A Case of İbradı*, コチ大学アナトリア文明研究センター主催ミニ・シンポジウム “Provincial Officials in the Ottoman Empire during the Mid-18th and 19th Centuries: Formation, Functions, Identities” 2010 年 5 月 14 日、コチ大学アナトリア文明研究センター、イスタンブール。

⑭Kan Hideki, *The US and the Colombo Plan: A Search for Regional Cooperation in Asia in the 1950s*, World Economic History Conference (第 15 回世界経済史学会)、2009 年 8 月 6 日、ユトレヒト大学、ユトレヒト、オランダ。

⑮Kawashima Shin, *The Image of Asia in Modern China: Historiography of the Traditional Chinese “World Order.”* First Congress of the Asian Association of World Historians, 2009 年 5 月 31 日、大阪大学中之島センター、大阪市。

⑯Uyama Tomohiko, *The Roles of Small Regions in Intercultural Relations and Conflicts: From the Bokey Horde to Abkhazia*, International Seminar “Eurasian Perspectives: In Search of Alternatives,” 2009 年 2 月 4 日、Maulana Abul Kalam Azad Institute of Asian Studies, Kolkata, India.

〔図書〕(計 28 件)

①Uyama Tomohiko, ed., *Sapporo: Slavic Research Center, Empire and After: Essays in Comparative Imperial and Decolonization Studies*, 2012, 133.
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no09/contents.html>

②宇山智彦編、北海道大学スラブ研究センター、比較帝国論の世界(比較地域大国論集 7)、2012, 253.
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/publications/no07/contents.html>

③Uyama Tomohiko, ed., *London: Routledge, Asiatic Russia: Imperial Power in Regional and International Contexts*, 2011, 311.

④萱英輝編、凱風社、東アジアの歴史摩擦と和解可能性：冷戦後の国際秩序と歴史認識を

めぐる諸問題, 2011, 510.

⑤菅英輝編著, 法政大学出版社, 冷戦史の再検討, 2010, 368.

[その他]

ホームページ等

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/rp/group_04/index.html

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇山 智彦 (UYAMA TOMOHIKO)

北海道大学・スラブ研究センター・教授

研究者番号: 40281852

(2) 研究分担者

秋田 茂 (AKITA SHIGERU)

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号: 10175789

山室 信一 (YAMAMURO SHINICHI)

京都大学・人文科学研究所・教授

研究者番号: 10114703

川島 真 (KAWASHIMA SHIN)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号: 90301861

守川 知子 (MORIKAWA TOMOKO)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号: 00431297

池田 嘉郎 (IKEDA YOSHIRO)

東京理科大学・理学部・准教授

研究者番号: 80449420

(3) 連携研究者

古矢 旬 (FURUYA JUN)

北海商科大学・商学部・教授

研究者番号: 90091488

菅 英輝 (KAN HIDEKI)

西南女学院大学・人文学部・教授

研究者番号: 60047727

粟屋 利江 (AWAYA TOSHIE)

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・教授

研究者番号: 00201905

秋葉 淳 (AKIBA JUN)

千葉大学・文学部・准教授

研究者番号: 00375601